

# 『苦海浄土』における暮らしの心象風景

尾野 薫<sup>1</sup>・星野 裕司<sup>2</sup>・山下 雄史<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 学生会員 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号  
Email: 101d9401@st.kumamoto-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 正会員 博士(工) 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号  
Email: hoshino@kumamoto-u.ac.jp)

<sup>3</sup> 非会員 工修 熊本市役所 (〒861-5521 熊本県熊本市鹿子木町66  
Email: yamashita.yoshifumi@city.kumamoto.lg.jp)

本研究では、文学作品における暮らしの記述に着目し、記述された要素から暮らしの心象風景を明らかにすることを目的とする。研究対象として石牟礼道子の『苦海浄土』を選定し、第一部第三章「ゆき女きき書」の中で水俣病やそれに関連する記述を除外した記述を分析対象とした。この分析対象に対して、松下文法を基に名詞句を抽出・分類し、クロス集計を行うことで、記述された要素の傾向を把握した。また、海上、地上、その他の記述ごとに要素の特徴を把握した。更に、水俣市の概要を整理し、要素の特徴と合わせて考察することで、暮らしの心象風景を明らかにした。その結果、海上では主体中心の心象風景、地上は空間中心の心象風景、その他の記述では普通の心象風景という3パターンによって暮らしを捉えていることを明らかにした。

**キーワード:** 苦海浄土, 石牟礼道子, 水俣市, 暮らし, 心象風景

## 1. はじめに

人は、生活の中で身近に存在しているものを風景として認識し、様々な場所で数多くの人と関わりながら生活している<sup>1)</sup>。生活の中で認識された風景は、体験として記憶に残り、醸成されることで心象風景となる<sup>2)</sup>。この心象風景について、心象風景のイメージ構造を分析する研究<sup>3)</sup>や、形成過程を明らかにする研究<sup>4)</sup>など、これまでに様々な研究が行われてきた。その中のひとつに、文学作品から心象風景を捉える研究がある。

文学作品は、人間を取り巻く環境を、書き手が独自の視点で再構成し、モデル化した作品である<sup>5)</sup>。書き手がモデル化した環境を心象風景として捉え、地域特性や都市景観という文学作品の舞台となる土地の構造を明らかにする研究が行われている<sup>6) 7) 8)</sup>。これらの研究では、自然や地名など地域特有の要素に着目し、文学作品から心象風景を読み取る手法論を重視している。また、日々の暮らしや出来事等の語り手の体験について、読者に想起させ共感させるために必要な要素やその特徴を明らかにしている。一方、心象風景には、人間、生物、四季等、

空間構成要素以外の要素も含まれており<sup>9) 10)</sup>、これらの要素によって人の暮らしの心象風景も構成されている。この暮らしの心象風景を明らかにすることができれば、人の暮らしという新たな視点から地域を捉え、暮らしに根ざした都市計画やまちづくりなどを考える一助となる可能性がある。

以上より、本研究では、文学作品における暮らしの記述に着目し、記述された要素から暮らしの心象風景を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究対象と分析手法

### (1) 研究対象の選定

本研究では、文学作品における暮らしの記述に着目し、暮らしの心象風景を明らかにする。よって、暮らしの記述をしている石牟礼道子の『苦海浄土』を、研究対象に選定する。

『苦海浄土』は、水俣を舞台とした石牟礼道子による小説である。石牟礼は『苦海浄土』について、「水俣病問

題の発端を描いてはいるけれども、子どもの頃からの目や耳で見聞きしたこの世の手ざわり、はだして歩くこともあった麦畑や海辺の岩や砂の実感を描こうとしたのかもしれない。」<sup>11)</sup>としている。また、水俣で暮らしてきた石牟礼が熊本市内の歌会に出かけた際、近代社会の変化や人々の姿を目にしてショックを受けた。その時のことを思い出しながら、「『苦海浄土』もこの度の『アニメの鳥』も、存在の原質ともいべき人びとを、うつつの姿として、ぜひともわたしは描き出したかった。」<sup>12)</sup>と述べた。すなわち、近代社会の変化によって引き起こされたともいえる水俣病問題について告発するだけでなく、その変化の中で暮らす人々の暮らしそのものを描くことも目的として『苦海浄土』が書かれたと考えられる。その結果、石牟礼は、いとなみを通じて森羅万象の世界を経験し、そういう角度から経験された世界の内実を復元しているため、庶民の経験世界を「この国の文学史上初めて明らかにした」書き手として評価されている<sup>13)14)</sup>。

以上から、暮らしの経験世界という語り手の暮らしを軸にした文学作品の一例として高く評価されている『苦海浄土』を、研究対象に選定した。

## (2) 分析対象の選定

研究対象である『苦海浄土』は、三部構成で水俣病の歴史を綴っている。第一部「苦海浄土」では水俣病が表れ出した混乱期、第二部「神々の村」では水俣病市民会議、水俣病患者互助会の結成と東京への出発、第三部「天の魚」は東京での生活とチッソとの協議が語られている。このうち、第一部第三章「ゆき女聞き書」の第一稿は1960年「サークル村」にて発表されており<sup>15)</sup>、現在の『苦海浄土』の第一稿と捉えることができる。また、渡辺<sup>16)</sup>や伊藤<sup>17)</sup>らのように、『苦海浄土』を通して石牟礼について述べる際、第一部第三章又は第四章を引用する機会が多く見られる。よって、本研究では、『苦海浄土』の第一部第三章「ゆき女聞き書」<sup>18)</sup>を分析対象として選定した。

本研究の目的は、文学作品を通して、暮らしの中で形成された暮らしの心象風景を明らかにすることである。

(1) で述べたように、『苦海浄土』は、水俣病問題の告発と、庶民の暮らしを描写するという2つの目的をもった作品である。よって、水俣病やそれに関する記述、雑誌の転記、病院内での出来事などを除いた暮らしに関する記述を分析対象とする。

## (3) 分析手法

小説は、人間を取り巻く環境を書き手が独自の視点で再構成し、心象風景としてモデル化した作品である<sup>19)</sup>。既往研究では、日本語の文法構造をもとに、心象風景の構成要素を抽出している<sup>20)21)</sup>。本研究でも同様に、書き手が心象風景として再構成した小説について、文法構造

から心象風景を構成する要素を抽出し、分析を行う。

日本語文法については、様々な研究が行われている。松下文法はそのひとつであり、明治から昭和初期にかけて活躍した松下大三郎による学説(一般理論文法学)で、構造主義言語論の一論と捉えられている<sup>22)</sup>。その特徴は、文章を構造的に分析し、詞の相関論によって各詞の関係性を言及していることである。詞の関係性には、主体的関係、客体的関係、実質的關係、連体的関係、修用的関係の5関係がある<sup>23)</sup>。本研究では、この松下文法の詞の概念とその関係性をもとに、要素の抽出や分析を進める。

## (4) 研究の流れ

3章では、『苦海浄土』の舞台となっている水俣市における地域の変遷や人々の暮らしについて、市史や地形図から概要を整理する。次に、4章では分析対象における心象風景の構成要素を抽出し、要素の傾向を把握する。最後に、5章では、3章で明らかにした水俣市の概要と、4章における心象風景の構成要素を合わせることで、『苦海浄土』における暮らしの心象風景を明らかにする。

## 3. 水俣市の概要

### (1) 『苦海浄土』と水俣市

『苦海浄土』の舞台は、熊本県南部に位置する水俣市である。作品内で記述される人は漁師が多く、水俣病を発症した患者も漁師やその家族が多かった<sup>24)</sup>。

漁師は環境の変化をいつでも察知できるよう、天候や海を眺めることを重視して集落を形成していた。つまり、環境の変化を捉える場合は、漁港や港湾など沿岸部に集中していたと考えられる。

分析対象の『苦海浄土』第一部第三章は、公式発見日である昭和31年前後の暮らしを記述している。よって、作品内に記述された昭和31年前後の暮らしについて、水俣市における漁業や港湾など沿岸部に関する地域の変遷から整理を行う。

### (2) 水俣市沿岸部の変遷<sup>25)26)</sup>

水俣は、明治22年の市町村制の実施に伴い、水俣村として誕生した。主な労働は農・漁業であり、副業として製茶、製塩等が行われていた。明治41年に日本窒素肥料株式会社(現チッソ株式会社)が設立されるまで、農・漁業が水俣で暮らす人々の主な労働であった。明治42年に石灰窒素工場が完成し、その後も工場の拡張が続いた。その結果、村民の生活だけでなく、村政にも影響を与えた。明治45年には町制施行が可決し、大正元年に水俣町が発足した。太平洋戦争後の昭和23年に市政施行案が可決され、水俣市が誕生する。昭和31年には、芦北郡

久木野村と合併が行われ、現在の水俣市が形成された。つまり、日本窒素肥料株式会社の設立をきっかけに、農・漁業を中心としていた水俣の人々の生活が、大きく変化したのである。

水俣市で最も古い漁村は、八幡や舟津である。昭和9年の水俣川河川大改修工事によって埋め立てられ、漁村としての機能も様相も失われた。

八幡や舟津以外で古くから漁業を行っていた地区に、丸島、梅戸、湯堂、茂道がある。これらの地区には漁港の原型となる船だまりがつくられ、芦北や天草から移住してきた漁民によって漁村の様相が形成された。昭和33年3月における市商工観光課の港湾調査で、丸島漁港、湯堂漁港、茂道漁港の3漁港が水俣の漁港として挙げられている。県が管理する丸島漁港は第二種であり、市が管理する湯堂漁港と茂道漁港は第一種に分類されている。第一種は地元の漁業が主で、第三種は全国規模の利用、第二種はその中間となる。表-1に、昭和33年における漁船の入港実績を示す。漁船の入港数より、丸島漁港の入港数の多さは明らかである。なお、湯堂の入港数が昭和25年から28年にかけて増加している。これは、袋湾が天然の避難港として利用されていたからである。

第二種漁港である丸島漁港は、寄港港として利用されていた。かつて物資の集散や貨客定期船の寄港港であった水俣川下流域が埋め立てられ、梅戸港へと移る途中に大廻りや丸島が、その機能を担っていた。水俣川下流域にあった寄港港には、精製された塩や山間地で生産された林産物を搬出する和船など、漁船以外の船も入港していた。つまり、水俣の産業発展の中心として重要な寄港地が、埋立工事により大廻り、丸島、梅戸港へと移っていったのである。この水俣の産業発展を担う寄港港の機能により、丸島漁港は多くの漁船が入港する第二種漁港に変化していったと考えられる。

舟を利用した漁業以外に、地引網漁を行っていた地区がある。恋路島、二子嶋、明神、百間、丸島、梅戸、袋村、月浦、湯の児が挙げられる。なお、袋村で行われた地引網漁は、湯堂や茂道に譲渡されている。これは、袋村の地引網漁は農業用の肥料確保を目的として行われており、漁業を生業としている人がいなかったこと、袋湾が遠浅のために船だまりがなかったことが理由とされている。また、袋湾は天然の避難港として台風や荒天時に利用されていたため、袋湾の入り口にある湯堂に港湾が形成されたと推察する。茂道も同様に、茂道山の茂みに囲まれた入江がある。この入江に目をつけた天草や芦北の漁師が移住し、船だまりがつくられた。

昭和29年までに、湯堂岬沖、茂道沖、明神沖に築磯作業として古船が沈められた。これはボラやチヌなどの巢をつくるためであり、これらの沖で漁をしていたことがわかる。昭和40年度以降も、毎年のようにコンクリート

表-1 昭和33年における漁船の入港実績 (単位: 隻)

漁港名	昭和25	昭和28	昭和31
丸島	20,011	24,056	28,963
湯堂	117	344	385
茂道	179	195	160

表-2 昭和24年度の水俣港の状況

港名	水深	定期航路				主要積出品	主要搬入品
		航路名	寄港地	便数	所要時間		
梅戸港	満潮時 4.6m	牛深	幣串 上平 深海	毎日1回	往復7時間	手荷物貨物ほか 乗船客 月平均2,340人	手荷物貨物ほか 乗船客 月平均2,280人
	干潮時 1.0m	大門	直行 御所浦 崖口ほか	毎日1回 2日に1回	往復5時間 往復9時間		
梅戸港 (新日室 工場専用 岸壁)	満潮時 9.6m 干潮時 6.0m	定期船舶なし 昭和24年度出入船舶およびトン数 1,343隻 100,201トン				硫安 鉄焼 燐ほか 毎月 約22,428トン	石炭 コークス 石灰原石 鉄鉱石ほか 毎月 約77,776トン
百間港	満潮時 2.6m (工事後 4.6m) 干潮時 1.0m	定期船舶なし 昭和24年度出入船舶総トン数 120,004トン				杭木 製材品 竹材 薪ほか 毎月 約2,066トン	干魚 瓦 その他 毎月 約866トン

ブロックによる漁礁の設置が行われている。設置個数や規格は年度により異なるが、設置箇所は茂道、湯堂、丸島、湯の児沖が中心であった。また、大崎鼻、二子嶋沖でも1、2度行われている。この漁礁の設置は、漁族の繁殖を目的としている。

湯の児は、温泉観光地である。明治期から掘削を繰り返し、昭和初期になって舟湯を始めとする温泉地の原型ができた。昭和8年10月1日現在の「湯の児温泉場案内」には、7軒の温泉旅館が確認されている。昭和9年に湯の児山上道路の工事が完成し、浴客の来遊が急増した。昭和20年終戦とともに熊本に進駐した連合軍の四大観光地のひとつに海の温泉として水俣の湯の児が挙げられるほど、湯の児は魅力ある観光地として発展した。また、湯の児温泉の前に広がる茶碗が鼻では、昭和2年から13年にかけて旅館街拡張のための埋立工事が3回行われている。その後、海岸線間際に立てられた旅館の安全確保と新たな観光資源としての活用を目指し、新堤防を含む海岸堤防工事が昭和46年から五か年計画で行われた。

梅戸港は、昭和10年に改修工事が完成した百間港と合わせて水俣港と呼ばれている。水俣港は昭和31年に貿易港に指定され、商・工業港として認められた。表-2に、昭和24年度の水俣港の利用状況を示す。これより、百間港は商業港、梅戸港は定期航路船が寄港し、新日室工場専用岸壁が設けられた工業港であったことがわかる。また、百間港には、新日室工場の排水を水俣湾へ排出するための百間排水口樋門が設けられていた。そのため、浚渫作業も頻繁に行われている。

水俣港の整備にあたり、恋路島と明神崎は自然堤防の役割を果たしていた。昭和31年には、第七管区保安本部により丸島沖から梅戸港、百間港内、恋路島、茂道岬沖にかけて、水深測定を含めた港湾調査が行われた。また、

同年には月浦船だまりの改修工事が完了した。月浦は、漁家50戸、漁船60隻を有する集落であったという記載しかないが、この港湾調査の範囲から、水俣港の一部として月浦、丸島沖、恋路島、茂道沖までが認識されていたと考えられる。

### (3) 水俣市沿岸部の地形的特徴

前項で挙げた地名や港湾名と用途を昭和35年に作成された地形図上にプロットしたものを、図-1に示す。

図-1における丸島漁港は、昭和32年の修築工事後の港湾である。一方で、茂道漁港は昭和48～49年度、湯堂漁港は昭和40～43年度に、けい船護岸工事や改修工事が行われている。つまり、昭和35年の段階では、茂道・湯堂の入江形状は確認できるが、丸島漁港のような港湾整備が行われておらず、図-1上では港湾の形状は確認できない。また、他にも入江形状を確認できる地点はあるが、地引網漁や漁港として利用していた記述はない。水俣の漁民の多くは、天草や芦北からの移住者である。よって、こうした移住者たちは、漁業という生業の視点から捉えた地形的特徴によって、集落を形成していたと推察する。

水俣港周辺は、貿易港として指定された後の姿である。昭和4年に百間港の改修工事が行われた際に埋め立てられ、道路、荷揚場、倉庫が建設された。そのため、図-1では改修以前の海岸線を把握することは困難である。しかし、梅戸港と百間港を繋ぐ道路や貨物路線とみられる鉄道路線が確認できる。また、梅戸港と百間港を繋ぐ道路は丸島漁港とも繋がっており、この一帯が新日窒工場等と共に発展していったと推察する。

以上より、水俣市沿岸部の変遷と地形図によって、水俣の人々が地域をどのように捉えていたかを整理した。その結果、漁業という生業から地形的特徴を捉えた漁港と、寄港港や工場という地上の機能と共に発展した港湾に分類することができた。まず、地引網漁を行っていた地区のうち、漁業という生業から地形的特徴を捉え船だまりがつくられた湯堂漁港と茂道漁港が、地元の漁業を主とする第一種漁港となっている。また、寄港港という機能から漁業中心の湯堂漁港や茂道漁港とは異なる整備が行われたため、丸島漁港は第二種漁港として発展した。同様に、寄港港としての機能を担った梅戸港は、新日窒工場が完成したために、漁業ではなく商・工業港として百間港とともに変化したと考えられる。

## 4. 暮らしの心象風景を構成する要素と傾向

本章では、『苦海浄土』第一部第三章「ゆき女きき書」における暮らしに関する記述から、暮らしの心象風景を構成する要素とその特徴を明らかにする。

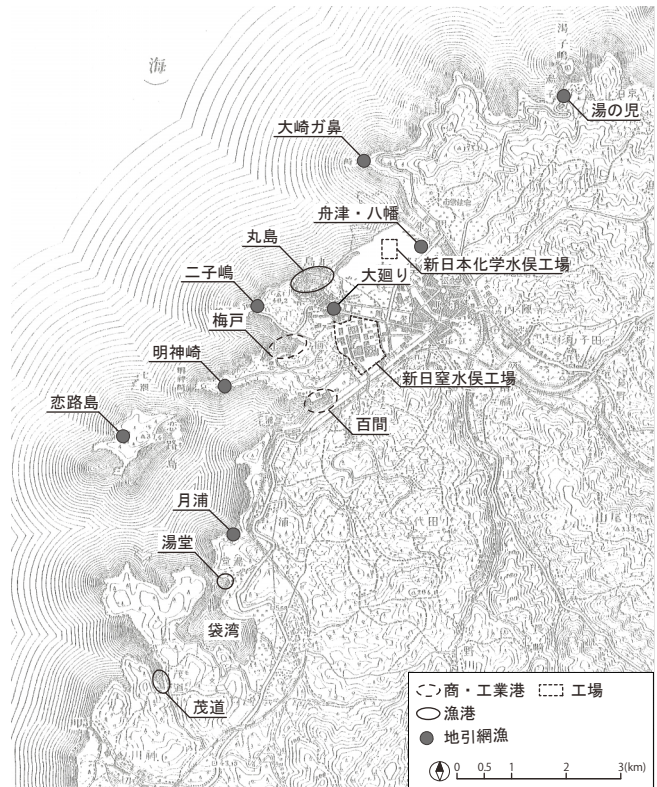


図-1 水俣市沿岸の港湾名とその用途  
(昭和35年水俣市管内図より一部抜粋)

### 【文】

国道三号線は、熱いほこりをしずめて海岸線にそってのび、月ノ浦も茂道も湯堂も、部落の夏はひっそりしていた。

↓ 助辞を手掛かりに分割

### 【詞句】

国道三号線は／熱いほこりを／しずめて／海岸線に／そって／のび／月ノ浦も／茂道も／湯堂も／部落の夏は／ひっそりしていた／

↓ 助辞を手掛かりに名詞句を抽出

### 【名詞句】

国道三号線は／熱いほこりを／／海岸線に／／／月ノ浦も／茂道も／湯堂も／部落の夏は／／

図-2 抽出の流れ

### (1) 心象風景の構成要素の抽出・分析手法

分析を行うにあたり、出現する名詞句全てを心象風景の構成要素とする。なお、本論の分析対象は名詞句で、関係性の把握に述部が必要となるが、副詞の断句については分析対象外とする。図-2に、抽出の流れを示す。

### (2) 要素の抽出・分析

前項より、心象風景の構成要素となる名詞句は405個抽出された。この名詞句を要素の意味で17種類に分類し、空間的要素、物的要素、媒質要素の3項目に集約した。

表-3に、要素の分類表を示す。空間的要素とは、海や地名、石垣道、土間のように空間を構成する不動産の要素である。物的要素は、岩や舟、魚や人など動いたり変化したりする、空間内に存在する動産の要素を指す。媒質要素は、かげろうや音、時間、四季のように物体ではないがその場に存在している要素を表す。本研究では、空間的要素の中に物的要素があり、それらを媒質要素が取り巻いていると定義する。図-3に、空間的要素、物的要素、媒質要素の概念図を示す。

抽出した構成要素405個の傾向について、要素と要素の関係性からクロス集計を行うことで定量的に把握する。なお、クロス集計を行うにあたり、横軸には要素の種類を、縦軸には2章(3)で述べた詞の相関論に基づいた詞の関係性である主体、客体、実質、修用主体、修用客体、修用実質の6項目を挙げる。

### (3) 心象風景を構成する要素の傾向

抽出した要素について、全体傾向を把握する。表-4に、クロス集計結果を示す。これより、物的要素の要素数が最多となっている。暮らしの心象風景を構成する際には物的要素が多く、その中でも道具が多く用いられる傾向にあることがわかる。また、空間的要素よりも媒質要素が多く抽出されている。都市空間や地域特性を把握する既往研究では、空間的要素や物的要素を主に抽出するため、媒質要素は抽出されない。しかし、全ての名詞句を対象とした本研究では、媒質要素も暮らしの心象風景を構成する要素として定義した。その結果、空間的要素よりも媒質要素が多く抽出された。つまり、空間的要素や物的要素だけではなく、その場に存在する状況を合わせて心象風景として再構成していることになる。

以上より、暮らしの心象風景を構成する要素の全体傾向を把握した。次に、文法に基づいた主体的関係、客体的関係、実質的關係それぞれにおける傾向を把握する。

#### a) 主体的関係

主体的関係における要素数は、物的要素の人が最多であるが、生物、道具、自然物のように人以外の要素数も多い。これは、人ではなく生物や道具のような無生物主語を用いることで、人の視点では捉えることができない心象風景を捉えようとしていると考えられる。

#### b) 客体的関係

全体の要素のうち、客体的関係の要素数が最多となる。これは、人が何かを捉える際、動作の対象が客体的関係の要素として抽出されるからである。

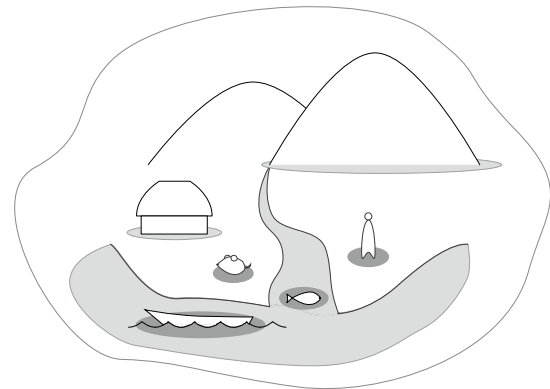
客体的関係における要素は、道具が最多である。「舟」「籠」など、漁や暮らしの中で使用していた道具を心象風景として捉える傾向が明らかになった。

#### c) 実質的關係

実質的關係の要素では、状態が最多となっている。状

表-3 抽出された名詞句の分類

種類	項目	具体例
空間的要素	自然	海 瀬 渚 沖 魚の居るとこ 島の根つけ 陸
	場所	地名 名所 窓の外 舟の持ち場 ベッドの上
	人工物	窓 家 土間 石垣 国道三号線 棚 工場の排水口
物的要素	自然物	岩 石 砂 麦畑 海の垢 岩穴 あをさ 薪のくすばり
	道具	舟 鱸槽 網 籠 洗い桶 水甕 まな板 鉤
	生物	魚 水鳥 鼠 タコ
	人	うち あんた 漁師
	身体	足 尻 節くれた皆の手 目
	行為	発言 息 魚獲り
	食物	刺身 魚の頭と尾 おつゆ じゃがいもの皮
物その他	沈殿物	
媒質要素	現象	かげろう 波 うねり 風 波の光の影
	季節	春夏秋冬 ポラの時期
	時間	四月 大学病院にいるとき
	五感	音 匂い
	状態	一面に ねっとり と 暗緑色
	信仰	エベスさま 守り神 魂



○ 空間的要素 ● 物的要素 ○ 媒質要素

図-3 空間的要素、物的要素、媒質要素の概念図

態とは、「のどか」や「凧」など語り手が捉えた他の要素について情報を追加する要素である。つまり、暮らしの心象風景においては、他の要素を補うために状態という情報を追加する要素を用いる傾向にある。

以上より、暮らしの心象風景を構成する要素とその傾向を把握することができた。

### (4) 海上・地上・その他の心象風景

3章では、漁業という生業から地形的特徴を捉えた漁港と、寄港港や工場という地上の機能と共に発展した港湾に分類した。よって、4章で抽出した要素を海上での記述と地上での記述に分類し、各記述ごとに特徴を把握する。その際、「今はもう麦どきでしょうが」や「もう舟も売ってしもうた」のように海上か地上か特定できない記述や、「海の底の景色も陸の上とおんなじに、春も秋も夏も冬もあつとばい」のように両方を捉えた記述など、明確に分類が困難な記述がある。これらの記述は、その他の記述として分類する。表-5、表-6、表-7は、各記述における心象風景の構成要素のクロス集計結果である。

a) 海上における心象風景を構成する要素

表-5 より、海上の記述では主体的関係と客体的関係の要素数がほぼ同数である。また、主体的関係では人や生物の要素が多く、客体的関係では道具や場所の要素数が多い。例えば「じいちゃんが艦橋ば漕いで、うちが脇橋ば漕いで。」という記述では、「じいちゃん」「うち」という人が「漕いで」という動作の主体であり、それぞれに「艦橋」「脇橋」という道具を用いている。これは、無生物主語の場合でも同じである。以上より、海上の記述では、主体的関係の要素を多用する傾向がある。

客体的関係の要素では、道具や場所を表す要素が多い。全体傾向にもあるように、道具が動作に伴う要素として捉えられるからである。海上では、道具と共に、場所が動作に伴う要素として捉えられていることになる。

実質的關係全体の出現数は他の2関係と比較すると少ないが、その中でも状態の要素数が多いという全体傾向とは一致している。「彼女は海に対する自在な本能のように、魚の寄る瀬をよくこころえていた。」という記述では、「彼女」という主体が「魚の寄る瀬」の自然に対して「こころえていた」という動作に、「海に対する自在な本能のように」という状態の情報を追加している。

以上より、海上の記述では、主体的関係の要素を多く記述する傾向が明らかとなった。また、動作の主体として人や生物を、動作に伴う要素として道具や場所を記述し、状態の要素で情報を追加することがわかった。

b) 地上における心象風景を構成する要素

表-6 より、地上の記述は、全体傾向と同様に物的要素数が多い。詞の関係性をみると、客体的関係の要素数が最多であり、主体的関係の要素数の約3倍となっている。客体的関係のうち、道具、場所、人工物の要素が多い。人工物は、「家」「土間」「石垣道」など地上につくられた要素である。以上より、人工物の要素は地上に集中して抽出されやすいと推察する。また、場所には部落を示す地名が多く使われており、これも地上という記述に集中しやすいと考えられる。

海上の記述に比べて、地上の記述では主体的関係の要素が少ない。「鼠たちはすぐそのような土間から石垣道にくぐり出る。おぼろな月明かりの道を横切り、石垣をくぐって舟へ飛んで、手ぐりの釣糸やうず高く積まれてひさしく使わない網などを片っ端から噛んだ。」という記述では、動作の主体である「鼠たち」の動作を複数記述しているが、主体が出てくるのは一度である。このような記述が、地上の記述では多用されている。また、「鼠たち」のように、地上における主体的関係の要素は人と同様に生物が使われている。動作の主体である「鼠たち」は、「土間」「石垣道」「月明かりの道」「石垣」という人工物を通り抜け、「舟」「手ぐりの釣糸」「うず高く積まれてひさしく使わない網」へと動作を向ける。このこと

表-4 心象風景の構成要素のクロス集計結果 (単位: 個)

分類		主体		客体		実質		合計
		主体	修用主体	客体	修用客体	実質	修用実質	
空間的要素	自然	7	0	11	7	6	1	32
		7		18		7		
	場所	4	0	26	2	1	5	38
		4		28		6		
	人工物	2	0	16	0	1	0	19
		2		16		1		
物的要素	自然物	9	2	12	3	8	0	34
		11		15		8		
	道具	10	0	34	16	3	1	64
		10		50		4		
	生物	18	6	9	2	0	0	35
		24		11		0		
	人	31	3	3	1	3	2	43
		34		4		5		
身体	1	0	9	1	5	1	17	
	1		10		6			
行為	0	1	10	2	3	1	17	
	1		12		4			
食物	1	0	2	1	1	0	5	
	1		3		1			
物その他	2	0	0	0	0	0	2	
	2		0		0			
媒質要素	現象	7	1	1	0	2	0	11
		8		1		2		
	季節	2	4	2	0	5	0	13
		6		2		5		
	時間	0	0	3	3	6	6	18
		0		6		12		
	五感	5	0	9	1	3	2	20
	5		10		5			
状態	5	1	4	1	20	3	34	
	6		5		23			
信仰	3	0	0	0	0	0	3	
	3		0		0			
合計		107	18	151	40	67	22	405
		125		191		89		

表-5 海上における構成要素のクロス集計結果 (単位: 個)

分類		主体		客体		実質		合計
		主体	修用主体	客体	修用客体	実質	修用実質	
空間的要素	自然	6	0	5	4	1	1	17
		6		9		2		
	場所	2	0	11	2	1	1	17
		2		13		2		
	人工物	0	0	1	0	0	0	1
		0		1		0		
物的要素	自然物	5	2	5	1	3	0	16
		7		6		3		
	道具	6	0	22	3	1	0	32
		6		25		1		
	生物	7	6	2	0	0	0	15
		13		2		0		
	人	19	3	2	1	2	0	27
		22		3		2		
身体	1	0	2	1	4	1	9	
	1		3		5			
行為	0	0	4	0	2	1	7	
	0		4		3			
食物	0	0	0	0	0	0	0	
	0		0		0			
物その他	2	0	0	0	0	0	2	
	2		0		0			
媒質要素	現象	2	1	0	0	1	0	4
		3		0		1		
	季節	0	0	2	0	0	0	2
		0		2		0		
	時間	0	0	2	1	1	4	8
		0		3		5		
	五感	2	0	3	0	2	1	8
	2		3		3			
状態	4	0	1	1	10	2	18	
	4		2		12			
信仰	0	0	0	0	0	0	0	
	0		0		0			
合計		56	12	62	14	28	11	183
		68		76		39		

から、地上では、動作の主体の記述が減少し、動作に伴う客体的関係の要素を多用する傾向にあるといえる。また、空間的要素のうち、人工物や場所は地上の記述に集中しやすい。これは、地上において人工物や場所が認識されやすいということでもある。人工物や場所は、人が認識している範囲を示すものでもある。つまり、この空間的要素による範囲の中で、動作に伴う要素を多く記述しているということになる。

以上より、地上の記述では、空間的要素は人が認識している範囲を示し、空間的要素の中で動作に伴う要素を多用し、動作の主体の記述は減少する傾向にあることがわかった。

### c) その他の心象風景を構成する要素

その他の記述には「今はもう麦どきでしょうが」「もう舟も売ってしまおう」「海の底の景色も陸の上とおんなじに、春も秋も夏も冬もあつとばい」などがある。「麦どき」「海の底の景色」「陸の上」「春」という要素は、海上や地上の記述で出てきた「魚の寄る瀬」や「石垣道」のように、ある定位置を示す要素ではなく、動作の因果や一般的な事柄の記述が多い。表-7より、その他の記述に空間的要素が少ない理由も、この一般性のためであると考えられる。また、物的要素だけではなく、媒質要素が多く抽出されている。「かげろう」という現象、「春」という季節、「麦どき」の時間など、媒質要素には動作の因果や一般的な事柄を含む。これより、その他の記述には媒質要素が抽出されやすくなると考えられる。

以上より、媒質要素や物的要素によって、動作の因果や一般的な事柄が記述された時に、その他の記述として抽出される傾向にあることが明らかになった。

## 5. 『苦海浄土』にみる暮らしの心象風景

本章では、3章の水俣市の概要と、4章で把握した暮らしの心象風景を構成する要素と傾向を合わせることで、心象風景からわかる水俣市の暮らしをどのように捉えていたのか考察する。図-1の地図上に抽出された空間的要素をプロットして、図-4に示す。なお、空間的要素には「シシ島の沖」や「くろの瀬戸」など海上の場所を表す要素がある。これらの要素は、場所の推定できるものをプロットする。また、「土間」「石垣道」のような人工物のプロットも難しいため、場所の要素を中心に、海上、地上、その他の記述から考察を進める。

### (1) 海上における主体中心の心象風景

図-4より、海上の記述における空間的要素のうち3章で明らかにした地名と合致するものは「茂道湾」「袋湾」「明神」「恋路島」「百間」である。このうち「茂道湾」

表-6 地上における構成要素のクロス集計結果 (単位: 個)

分類		主体		客体		実質		合計
		主体	修用主体	客体	修用客体	実質	修用実質	
空間的要素	自然	1	0	6	2	1	0	10
	場所	0	0	14	0	0	3	17
	人工物	2	0	14	0	1	0	17
物的要素	自然物	0	0	4	1	1	0	6
	道具	3	0	11	4	0	0	18
	生物	10	0	5	0	0	0	15
	人	6	0	1	0	0	2	9
	身体	0	0	6	0	1	0	7
	行為	0	0	4	0	0	0	4
	食物	1	0	2	0	0	0	3
	物その他	0	0	0	0	0	0	0
媒質要素	現象	1	0	0	0	1	0	2
	季節	1	0	0	0	0	0	1
	時間	0	0	0	0	4	0	4
	五感	3	0	5	0	0	1	9
	状態	0	0	3	0	4	0	7
	信仰	0	0	0	0	0	0	0
合計		28	0	75	7	13	6	129

表-7 その他における構成要素のクロス集計結果 (単位: 個)

分類		主体		客体		実質		合計
		主体	修用主体	客体	修用客体	実質	修用実質	
空間的要素	自然	0	0	0	1	4	0	5
	場所	2	0	1	0	0	1	4
	人工物	0	0	1	0	0	0	1
物的要素	自然物	4	0	3	1	4	0	12
	道具	1	0	1	9	2	1	14
	生物	1	0	2	2	0	0	5
	人	6	0	0	0	1	0	7
	身体	0	0	1	0	0	0	1
	行為	0	1	2	2	1	0	6
	食物	0	0	0	1	1	0	2
	物その他	0	0	0	0	0	0	0
媒質要素	現象	4	0	1	0	0	0	5
	季節	1	4	0	0	5	0	10
	時間	0	0	1	2	1	2	6
	五感	0	0	1	1	1	0	3
	状態	1	1	0	0	6	1	9
	信仰	3	0	0	0	0	0	3
合計		23	6	14	19	26	5	93

「袋湾」「明神」「恋路島」は、「工場の排水口を中心に、沖の恋路島から袋湾、茂道湾、それから反対側の明神ガ崎にかけて、漁場の底には網を絡める厚い糊状の沈殿物があつた。」という記述から抽出されている。これらの場所は、魚の巣を作るために築磯作業が行われた湯堂岬沖、茂道沖、明神沖と合致する。「恋路島」は明神崎と合わせて自然の防波堤として機能しており、水俣港である「百間」を守っていた。また、「あそこは今おぼえなもう百間の海にゃ魚はおりよらんじゃったもん。」という記述にあるように、港という認識ではなく、漁の中で異変を捉えた「百間の海」と認識しているのである。「百間」には、工場の排水口があつたことから、「百間」が環境の変化の中核として認識されていたと考えられる。

海上の記述で、主体的関係の要素を多く記述する傾向がある。漁業の場として認識された場所は、いずれも「湾」や「海」など示す範囲は曖昧である。環境は徐々に変化するものであり、その範囲も徐々に変化する。一方、動作の主体である人や生物は、動作する中心となる。つまり、変化する環境を認識する場所は曖昧に示しながら、動作の主体を中心に記述しているのである。これは、漁業の場が漁師の生業の視点によって選択された場であり、場所の範囲よりも行う行為を重視していたからである。場所で行う動作を重視した結果、動作を行う主体が多く記述されると考えられる。

以上より、漁業の場は環境の変化を捉える場として認識されており、工業港であつた「百間」が変化の中核であることが明らかとなった。また、徐々に変化する環境を認識する曖昧な場所で、動作の主体を中心に記述している。これを、主体中心の心象風景とする。図-5に、主体中心の心象風景の概念図を示す。

## (2) 地上における動作中心の心象風景

図-3より、地上の記述における空間的要素のうち3章で明らかにした地名と合致するものは「大崎」「八幡・舟津」「丸島」「梅戸」「百間」「明神」「月ノ浦」「湯堂」「茂道」である。これらの地名は、主に2つの記述から抽出されている。

ひとつは、「鹿児島県出水群米ノ津前田あたりから水俣湾の渚は、茂道、湯堂、月ノ浦、百間、明神、梅戸、丸島、大廻り、水俣川河口の八幡舟津、日当、大崎ガ鼻、湯の児の海岸へと、そのような鳥たちの死骸がおちており、砂の中の貝たちは日に日に口をあけて、日が照ると、渚はそれらの腐臭が一面に漂うのである。」である。「鳥たちの死骸」や「砂の中の貝たち」という生物は、環境汚染によって影響を受けた姿で記述されている。以上より、地上の工場発展に伴う環境変化を受けた結果として、空間的要素の場所が用いられている。

もうひとつは、「国道三号線は熱いほこりをしずめて

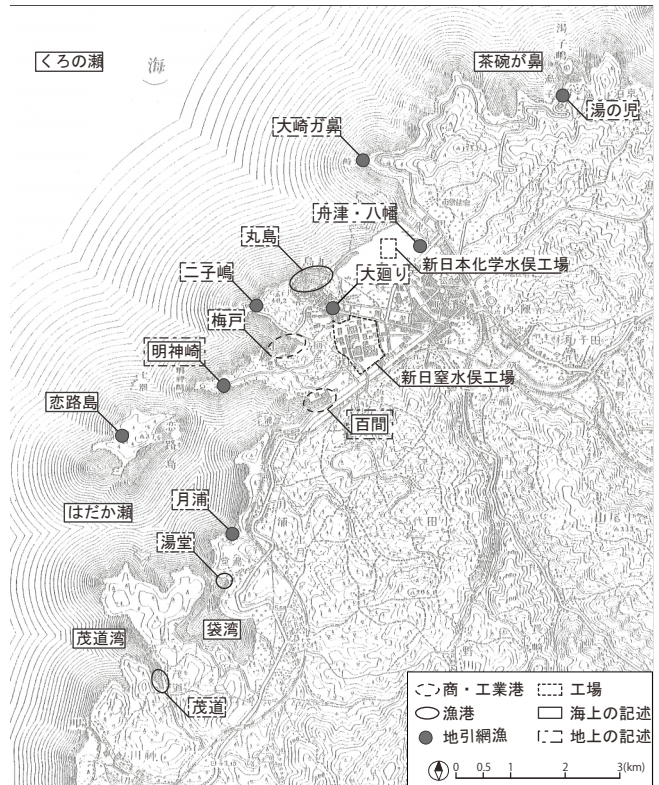


図-4 心象風景における地名と水俣市沿岸の港湾とその用途 (昭和35年水俣市管内図より一部抜粋)

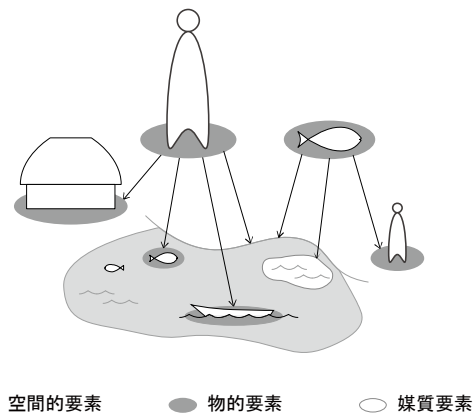


図-5 主体中心の心象風景の概念図

海岸線にそってのび、月ノ浦も茂道も湯堂も、部落の夏はひっそりとしていた。」である。ここでは、漁港として認識されている「茂道」と「湯堂」、漁港整備が行われた「月ノ浦」が抽出されている。これらの場所は、漁港として海と繋がる場所であり、場所の変化を「ひっそり」という部落の状態を伴うことで記述している。茂道漁港と茂道湾、湯堂漁港と袋湾は、港と湾をあわせてひとつの漁港を形成している。心象風景の構成要素として抽出すると、海上では「茂道湾」「袋湾」、地上では「茂道」「湯堂」と個別に記述されている。このことから、海上の記述では、漁業という生業から地形的特徴を捉えた湾を環境の変化を捉える場として、地上の記述では漁港整備と共にある部落を環境変化の影響を受けた場所として

捉えていることが明らかになった。また、整備された漁港は、両方の視点で捉えていると考えられる。

また、地上の記述においては、空間的要素は人が作りだした認識境界であり、生物の動作を通して認識境界を記述している。この認識境界の中には、物的要素や媒質要素が含まれている。物的要素や媒質要素は、動作に伴う要素として多く抽出されている。そして、動作に伴う要素を多用する際に、動作の主体の記述が減少する傾向にある。つまり、空間的要素によって作りだした認識境界という場の中で、その中に含まれる物的要素と媒質要素を動作に伴う要素として捉えている。また、動作を行う時に、動作の主体の記述は減少しているが、人だけではなく生物を動作の主体とすることで、空間的要素の認識境界を捉えようとしている。これにより、空間的要素における場所の要素が、環境変化を受けた結果として、その中で発生した動作によって形成された場所として認識されたと考えられる。つまり、地上では、空間的要素を中心として、その中で発生した動作に伴う要素を捉えていると考えられる。

以上より、空間的要素における場所の要素は、海上では環境の変化を、地上では環境変化を受けた結果という異なる視点で捉えており、整備された漁港は両方の視点で捉えていることが明らかになった。また、地上の記述では、空間的要素を中心として、その中で発生した動作に伴う要素を記述している。これを、空間中心の心象風景とする。図-6に、主体中心の心象風景の概念図を示す。

### (3) その他における普遍の心象風景

地上でも海上でもない記述における場所の要素は、「濃い精気を吐き放っている新緑の山々や」「やわらかくくねって流れる水俣川や」「五月の水俣は」「陸の上と」のように一般名詞の要素である場合と、「こんなベットの上に」「窓の外には」「そのような景色を見渡せるこの二階の病棟の窓という窓から」のように人工物の要素の場合に分けられる。どちらの場合においても、図-4の地形図上にプロットすることは困難である。つまり、その他の記述においては、定位置にプロットできない一般的な空間的要素が認識されていることになる。しかし、「そのような景色を見渡せるこの二階の病棟の窓という窓から」見渡していたのは、「濃い精気を吐き放っている新緑の山々や」「やわらかくくねって流れる水俣川や」「五月の水俣は」といった地域全体を構成するような一般的な事柄である。また、「今はもう麦どきでしょうが」のように、「今」と「麦どき」という時間の媒質要素を用いて動作の因果関係や一般的な事柄も記述されている。つまり、地域全体の特徴を把握したり、媒質要素や物的要素によって動作の因果や一般的な事柄が記述された時に、その他の記述として抽出される傾向と一致する。

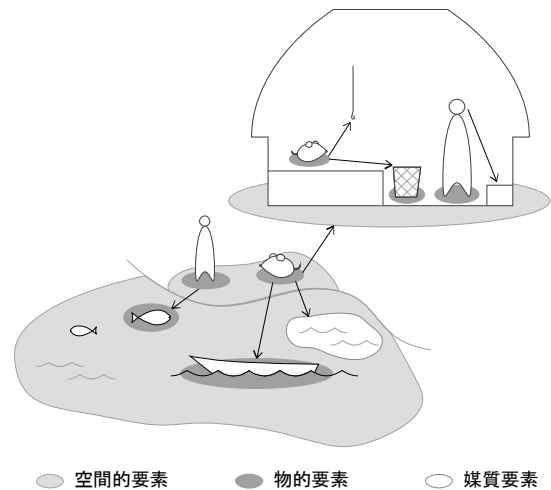


図-6 空間中心の心象風景の概念図

以上より、その他の記述は定位置にプロットできない一般的な空間的要素の中にある物的要素によって、地域全体の特徴を把握したり動作の因果関係や一般的な事柄を捉えた心象風景である。これを普遍の心象風景とする。

### (4) 『苦海浄土』における暮らしの心象風景

海上、地上、その他の心象風景の捉え方について、それぞれ考察を行った。その結果、主体中心、空間中心、普遍の心象風景という3パターンによって、暮らしを捉えていることが明らかになった。

海上の心象風景は、主体中心の心象風景であり、環境の変化を捉える場所として空間的要素を利用している。一方で、地上の心象風景は、空間中心の心象風景であり、環境変化を受けた結果がわかる場所として空間的要素を利用している。この異なる2視点が繋がる場所として、港湾が機能している。港湾のうち、地域の漁港である茂道漁港と湯堂漁港、漁業の場として利用されていた明神ガ崎と湯の児が、環境の変化とその結果を海上と地上の両視点から捉えている。また、百間港は、「工場の排水口」によって環境変化の中心として認識されている。また、海上の「茂道湾」と地上の「茂道」のように、同じ場所でも記述名が異なっている。これは、生業という視点で捉えた海上の「湾」と、港湾整備という人の手によって形成された地上の「茂道」という異なる捉え方を行っているからである。これより、海上では漁業という暮らしの中で動作の主体を中心に環境の変化を捉え、地上では変化の影響を受けた結果として暮らしの中にある要素とその空間を中心に捉えていると考えられる。

普遍の心象風景は、定位置にプロットできない一般的な空間的要素の中にある物的要素によって、地域全体の特徴を把握したり動作の因果関係や一般的な事柄を捉えている。そのため、地域全体の特徴は、四季や時間表現、信仰という媒質要素によって動作の因果関係や一般的な

事柄を説明している。

以上より、『苦海浄土』における暮らしの記述から、海上では漁業という暮らしの中で動作の主体を中心に環境の変化を捉え、地上では変化の影響を受けた結果として暮らしの中にある要素とその空間を中心に捉えていることが明らかになった。また、四季や時間という媒質要素によって動作の因果関係や一般的な事柄を説明し、地域全体の特徴を捉えていると推察した。

## 6. まとめ

### (1) 結論

以下に、本論で得られた結論を示す。

- a) 石牟礼道子による『苦海浄土』に記述された当時の水俣市について、当時の地域の変遷と暮らしから概要を整理した。その結果、漁港、商・工業港、地引網漁が行われていた地域とその変遷を明らかにした。
- b) 『苦海浄土』第一部第三章ゆき女きき書を分析対象とし、文法に基づいて名詞句の抽出を行った。その結果、405個の名詞句を抽出し、3分類17項目に分類した。また、要素の種類と詞の相関論に基づく要素間の関係性によるクロス集計から、要素の特徴を把握した。
- c) 水俣市の概要と心象風景の捉え方から、水俣に暮らす人々が地域をどのように捉えていたのかを明らかにした。その結果、海上では、漁業という暮らしの中で動作の主体を中心に環境の変化を捉える主体中心の心象風景となることを明らかにした(図-5)。地上は、変化の影響を受けた結果として暮らしの中にある要素とその空間を中心とした空間中心の心象風景となることがわかった(図-6)。その他の記述では、四季や時間という媒質要素によって動作の因果関係や一般的な事柄を説明し、地域全体の特徴を捉える普遍の心象風景であることがわかった。

### (2) 今後の展望と課題

本研究は、文学作品における語り手の暮らしに着目し、記述された要素から暮らしの心象風景を明らかにすることを目的としている。その結果、海上、地上、その他の心象風景という3パターンによって暮らしを捉えていることを明らかにした。

しかし、この心象風景は、一作品の一部において分析した結果、明らかになった捉え方である。よって、『苦海浄土』の他の章における心象風景について、同様に分析する必要がある。また、都市計画や地域計画、まちづくりに応用するための知見として活かすためには、明らかにした暮らしの心象風景と実空間との相違を分析する必要がある。

## 参考文献

- 1) 風景デザイン研究会：風景のとらえ方・つくり方 九州実践編、共立出版、4p、2008。
- 2) 渡辺成博、松本直司、高木清江：心象風景の形成過程と現実の空間形態、日本都市計画学会学術論文集、No. 31、pp. 175-180、1996。
- 3) 岩永敬造、松本直司：都市の心象風景に関する研究 一長野市の心象風景のイメージ構造について、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 28、pp. 451-456、1988。
- 4) 西村匡達、松本直司、寺西敦敏：都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究、日本都市計画学会学術論文集、No. 27、pp. 721-726、1992。
- 5) 池田朋子、大貝彰：1970～94年の芥川賞受賞作品群にみる自然景観イメージとその変遷、日本建築学会計画系論文集、No. 494、pp. 161-168、1997。
- 6) 池田朋子、紺野昭：文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究 小説『城のある町にて』をケーススタディとして、日本建築学会計画系論文報告集、No. 450、pp. 121-130、1993。
- 7) 池田朋子、大貝彰：文学作品中の空間描写にみる都市景観に関する研究 一高山のケーススタディー、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 28、pp. 583-588、1993。
- 8) 池田朋子、大貝彰：高山の地方文学受賞作品に書かれた都市景観に関する研究 一文レベルの分析を通じて、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 29、pp. 601-606、1994。
- 9) 前掲7
- 10) 前掲2
- 11) 石牟礼道子：煤の中のマリア 島原・椎葉・不知火 紀行、平凡社、191p、2001。
- 12) 石牟礼道子：煤の中のマリア 島原・椎葉・不知火 紀行、平凡社、193p、2001。
- 13) 渡辺京二：石牟礼道子の時空 【『あやとりの記』『おえん遊行』を読む】、不知火-石牟礼道子のコスモロジー、藤原書店、pp. 174-200、2004。
- 14) 結城正美：〈庶民の文化〉とエコロジカル・アイデンティティ、「場所」の詩学 一環境文学とは何か、藤原書店、pp. 41-55、2008。
- 15) 池澤夏樹：解説 不知火海の古代と近代、石牟礼道子、苦海浄土、河出書房新社、pp. 757-771、2011。
- 16) 渡辺京二：解説 石牟礼道子の世界、新装版 苦海浄土 わが水俣病、講談社、pp. 364-386、2004。
- 17) 伊藤洋典：石牟礼道子と現代思想、石牟礼道子の世界、弦書房、pp. 165-199、2006。
- 18) 石牟礼道子：苦海浄土 第一部 苦海浄土 第三章 ゆき女きき書、河出書房新社、pp. 79-104、2011。
- 19) 前掲5
- 20) 前掲7
- 21) 前掲8
- 22) 徳田政信：図説 松下文法ハンドブック 一一般理論文法の先駆一、勉誠出版、pp. 25-59、2006。
- 23) 鈴木一：松下文法論の新研究、勉誠出版、pp. 26-34、2006。
- 24) 原田正純：解説 水俣病の五十年、新装版 苦海浄土 わが水俣病、講談社、pp. 387-408、2004。
- 25) 水俣市：新・水俣市史 下巻、水俣市、1991。
- 26) 水俣市：新・水俣市史 民俗・人物編、水俣市、1997。